

南總里見八犬傳第七輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第六八回

穴山の枯野に村長秋實を救ふ
猿石の旅宿に濱路濱路を誘ふ

奈未與美の甲斐州へ洲の四境皆山とありて甲斐と名つけり。甲斐の峽
り。峽の間へ人食山の峽に住りてこれを甲斐といふ。抑富野穴山の西御の
西の白峯鳳凰山。又法王山。地藏嶽藥師嶽あり。西北に駒嶽八嶽あり。北に
金峰山あり。白峰の古歌に甲斐の峰と詠る。のほほこの他身延山七面山夢山
秋山櫻尾岳塩山神座山中山篠子天目山あり。蕃山禿山に至りては儂る。小
遣のわがざに。當時の國守武田家の城に八代郡躰躰崎に在り。これを古府と呼
做せり。中府新府のいふ。より。後世の稱呼に就中富野穴山の西と南北の三方

ついで崎
の城并み
石和の古
城のついで
第五の巻
のついで

秋野

膳茶院

空しくも帰る人とも毒も真の丈夫と成るむ死人の要なき名
刀を今取らむと捨てて後悔も立かた。物せよと其は媼内莞介と
うち笑み仰寔に至極せり然る路銀の山分りて僕も賜ふかといはる果む
領きくいあや及疾せるといそが立主従の舊の所かへ牙の且先右を足
かへし媼内既の信乃が力手を取けり。零んと志る腕を信乃の臥
楚と捉へて曳一曳と投蜚せ媼内の吐嗟と叫びく筋斗する身を虎を
三間をりゆるる株の膝を撲惱さる要時の起るるけり件の武士の
光景の駭くと大くあむ持する鳥銃振内く撃つと走り蒐るを
信乃の透さる足を飛く亦脇腹を破と蹴らる苦と叫びあむ
鳥銃裏と投捨る両三歩踏地を刀を抜んとする程信乃の身を
身を起りて透る鳥銃より揚る程あむ件件武士の刀を曳りと振揚る

真額臨み研らんとする信乃の騷る鳥銃にて受流し拂退く六七合
戦の程媼内や多く身を起り半縮る中刀を技敵め背後よりや
近づく尻目かたる信乃の比の本事と出く鋭と宛電光の塵を走る
異あむ既め件の武士の刀を破と打落す背後内り媼内が刀め多く
身を及り肩尖丁と打り斃居居と平伏より透るあむ件件武士の
組んとするも果む又腕を破と打ち卷の牙の要時め堪む云とむるま
仰反る主を資る媼内起あむとする程信乃の鳥銃より揚り又媼内を
打伏る本事の怯む件の武士も起んとする背隅席薦の塵埃を拂かどく
され被存一打居らる主従息もえく免一と叫ぶる信乃の怒る声高
あむ汝人を識らむと不良の心を起せし睡る虎の鬚を曳く鼠め似る白
徒之口牙め悪るといふ仇を寄せんとはふより倒臥せしを考るや汝人の

ノ六信十車巻四
○浦島太郎



よのよ

天塚信乃

甲斐の道
中め信乃
奈四郎を
懲す

ノ六信十車巻四
○浦島太郎



天塚信乃

美内

信乃を編室の休らぬ夜食を薦め浴をうと大なるお歎待せ信乃の
 世の浅からぬ歡びを述べ奴婢共が布儲の房臥尊ぬ入の軀を枕に就きしより
 翌の風もよく出ゆゆと用意をなせしこの夜俄頃初雪きて詰旦も雪は
 歇す山の里も白妙の積り深く月もあはれいと思ひて早飯も果
 比のト木工作の編室の来と信乃の客今茲の夏の国ゆと今十月の季
 來り節の十月の中を過すはと云ふや雪もやと云ふくはと云ふ似げも野も
 山の降埋るるを言せぬ旅ぬあはれ且く逗留あかかとの山野の掙すも
 ちも小人も亦徒然と云ふ辭敵不足らとも聊慰らるるをへとの議小
 従ひ多と云ふ辭を盡しと云ふを信乃も有數を推辞しと云ふ僅かその意小任せ
 一は木工作斜らと云ふ歡びと云ふの泡雪奈四郎が贈する鬼を調理一酒を薦
 め終日相譚の消けりこれより後日次よりで或は曇り或は風を免雪をさそく

信乃を編室の休らぬ夜食を薦め浴をうと大なるお歎待せ信乃の
 世の浅からぬ歡びを述べ奴婢共が布儲の房臥尊ぬ入の軀を枕に就きしより
 翌の風もよく出ゆゆと用意をなせしこの夜俄頃初雪きて詰旦も雪は
 歇す山の里も白妙の積り深く月もあはれいと思ひて早飯も果
 比のト木工作の編室の来と信乃の客今茲の夏の国ゆと今十月の季
 來り節の十月の中を過すはと云ふや雪もやと云ふくはと云ふ似げも野も
 山の降埋るるを言せぬ旅ぬあはれ且く逗留あかかとの山野の掙すも
 ちも小人も亦徒然と云ふ辭敵不足らとも聊慰らるるをへとの議小
 従ひ多と云ふ辭を盡しと云ふを信乃も有數を推辞しと云ふ僅かその意小任せ
 一は木工作斜らと云ふ歡びと云ふの泡雪奈四郎が贈する鬼を調理一酒を薦
 め終日相譚の消けりこれより後日次よりで或は曇り或は風を免雪をさそく

降ゆれば信乃の顔より苗めれく。多きも日を累る随ふらう。この家のやうを見
 望ふ女房の後妻を。その名を夏引と呼ぶ。年才三十四五許ゆるん
 ぶ。容止も醜く。又二八なる女児只箇あり。當面め。くもたご
 顔の三月の櫻花の似。雨を厭の風を恨る風情あり。秋夜の新月。優て雲の
 扱。露の消さる。歎きあ。如く常。奥より操持。筑紫琴の調妙あり。
 彼俊蔭の女児も。客ら。と。せ。これその名を濱路といふ。やわ。濱路々々
 と呼ぶ。を紙門隔め。毎。信乃。了。得。亡妻の。と。あ。ひ。出。壁。向。ひ
 嘆息す。現田舎。早。女児。の。親。継。け。れ。や。幼。母。折々。叱り
 態。を。一。言。も。恃。ら。ず。機。を。攬。る。孝行の。大。さ。な。故。る。べ。は。外
 他人の。揚。り。知。ま。き。の。を。後。具。原。木。工作。前。妻。名。を。麻。苗。と
 呼。と。四。檢。を。と。了。比。時。疫。も。身。も。ら。後。妻。夏。引。の。乳。を。の。て。仕。へ。

女児濱路が妹母より。渠が良入の世を。より。る。の。る。濱路が乳母の
 る。外より。娶。る。優。下。木。工作。を。推。登。後。妻。を。ま。り。け。然。ハ
 夏引の。ひ。は。村長の妻。より。家の女児。不。為。主。り。け。と。子。と
 ま。れ。初。年。の。程。行。状。を。慎。も。些。も。継。母。の。面。色。せ。い。濱路と慈
 愛。ら。内。を。ま。木。工作。竊。飲。ひ。物。の。出。納。他。の。も。か。う。任
 用。る。隨。夏。引。の。早。晩。驕。り。つ。衣。裳。髪。の。飾。わ。已。身。の。綺。羅。を
 盡。く。濱路を。初。の。如。く。せ。す。刺。圍。の。守。の。山。林。管。領。泡。雪。奈。四。郎。と。密。通
 多。く。良。入。木。工作。が。木。工作。の。山。菰。屋。の。曉。と。夜。の。奈。四。郎。を。母。屋。引。合。て
 不。義。の。樂。を。取。る。と。然。と。又。奈。四。郎。の。或。村。役。或。山。獵。小。假。托。四
 六。城。の。宿。所。小。起。臥。ま。木。工作。を。曉。得。ら。只。濱路。の。聰。く。猜。と。浅
 ち。母。と。諫。ん。り。父。告。死。る。心。苦。と。限。も。夏。引。も

亦その氣色けいしきの察さつしと濱路はまぢを鬱悒うげいきりのつゝのいさゞ彼奴かいつを遠離とんりく後ごを
くまげしと足あし折をり々良人らじんの勸すすむ濱路はまぢの既すでに年としふらふ春はるより女に塔たか目を
擇えらむととゞまご相あ忘わすれ死しめゆも然しからば生なま心こころは妙た子こと遊あそぶの宿やどの
在ある果は果はの死しるのわりとも死しまふ守まもりの奥おく隸れい達だつの便べんり討うめ給たま事ことの
まゐるせ更さらの傍はた輩はいの接せるも亦是また修行しゆぎやうの二に箇が中ちゆうその身みの為ためにたゞといふ
ら使つかふ所の理ことわりりるも木き工作くわくの徒たらぬやう頭あたまをち掉おりて見み守まもりの意見いけんは然しから
とされども給たま事ことふまゐらせつゝの姉あね譚だん整ととのふとも年限ねんげん果はつ親おやの自由じゆうの身みの
暇ひまとてふとゆるあも又また怒いかるをゆるめり猛まうの暇ひまをふとあつゝのいひかた
ま首くび尾びのさき筋すぢわが親おやの難がた義ぎあるさうんや且かつち捨すて措さぐと制せいめて
ら引ひ氣き色しきはひま夏なつ引ひ心こころ焦こ燥さうく甲か斐ひるしと必かならずとも強つよく勸すすめり此
はけはべいふせまうとあふ程ほどの木き工作くわくの又またゆる頂たか塚づか信のぶ乃のりと誘すすめりて用もちを

既すでに日ひと赤あかく夏なつ引ひいふ歡よろこび人ひと目の閑ひまのミ尋たづねりふ奈な四し郎らうも亦または
こおつれひま
ま音ね耗た久く絶たへいふとさうく氣きをのこく怒いかるを相あせがもる死しるもて
濱路はまぢと大おほく罵ののするわが宿やどの在あると一ひと毫ごうも然しから氣き色しきとる存ぞん濱路はまぢの
いと優やさしく物ものて信まこと乃のりの茶ちやとあるせよ爐いろ炭たんを續つぐまゐらせよ折をり々奴やつ婢ひの
分わ付つけく真まこと實まことげぬ欺あや待まちけは木き工作くわくの阴いん陽やうの妻つまの底そこ意いを知しねる信まこと乃のり
あまの事情じやうじやうを大おほく猜あやせしふ屢しばしばわづ別わかれを告つぐ立たまふんとされども木
工作くわくの只ただ管くだみをりて管くだみ待まちをりぬ弥よ増ぞうう以もつてある木き工作くわくの信まこと乃のりが骨ほね相あ進すす止とどの
人の捷あてまうのさるその武ぶ藝ぎの比ひ類るいる死し本ほん事ことを既すでにふせけしといふ國くに守まもりへ
る人を薦すすめらるる重おも用もちせられ俸ほう禄りくの隨したがふべし有此このやうに而して濱路はまぢを妻つませ
るも年来としよりの願ねがひ足たりらぬれども此このやうに死し山やまの屋やりぬ大おほく打うち泡あわ雪ゆき
生なまかまぬ恨うらみも妨さまたげん扶たすけとも亦また測はかりかざる彼か人ひとをより上あげざる脚あし家や老らう



有花不語春
鳥寄聲有水
無意蟾蜍遺
瓊 葦笠題

信乃



此東奴

三

三

如此と云く欲き侍りたる来ませと先立と伴と云ひのちその後
 るるあまの侍り何事といふやとめて覺る心地とて面目も侍りといふ
 當下信乃の感歎の聲を礫と打拍りとこれゆゑの合さるありありと
 婦人あへ某舊里の存一時結髪未通女ありその名と濱路と喚做
 介るふ渠の故ありと悪棍の為の勾引を丁に従ひて節死する
 名も年紀も似る息女の肢體を借りて今宵竊は某のいのちの亡
 魂の所為と云れん寔の奇かき疑似の傍難を解とるを願はけと
 父が出来腹を抱く俯ら仰ぎうち笑ひ扱ふらうかたより餘程實の
 作ると死靈あたる當座の脱路有理らくゆめれども僕と云るは阿家
 たる感心をこれと扱とむる火つけ朝けと云と夏引の領さく人の
 故御の結髪せられ妙も名なり一飲そが冤魂の所為と云と證據も

あて疑も然とも正に証や侍ると詰ると木工作推禁めく復ても出来
 奴が濱路が穿鑿と云ふは頼む死無益の口を啞んより臥房へ退りて
 睡む夏引も亦大人氣を数も足らぬ小厮の過言相槌を打つとや
 ある寔の女子と小人の親ひと死ののめと歎息の信乃の對ひて大塚
 る死口舌を傍痛く必ひめ妻奴子の左も右も其の疑心願ふ人意
 る名も殊さふ飲死の女児と貴所の亡室と同名の義は且渠が
 馮りとのれといふ一奇談の俺們親子の幸ひと既ふと云の便宜を
 宵憶を盡すべし某原の信濃の人氏某科太郎市と呼よりの獨見
 親めて太郎市と井丹三直秀ゆめ仕下が直秀ゆめ春王安王西公達
 身方ゆ結城の城を籠りぬの嘉吉元年夏四月落城の日血戦を
 陣歿をゆめと云と某科太郎市も既ぬ深瘡を負い辛く信濃かへて

その方さるふ云と執り、軀々腹かき切り、冥土の供と仕りぬ某の尚総角なり。母の年来身病あり、その死つ春世と去り、さる結城の残黨を里人。心とちひは、舊里の住の遂に稱る。この地外伯父あり、かごづの行と身と寓せし。伯父夫婦の男児を、只一箇の女児あり、その名を麻苗と呼做し、有り此而、長年長女、女児と某の妻、壻養嗣をせし、けり。介後養父母の世と去りて、某村長の職と、永嗣ぎ且相傳の山林あり、富むありぬ、ど貪むありぬ、介介るふ、其弱冠より、殺生を好み、か暇ある折、毎只山獵と事と、鳥獸の命を捕る。いそむ、そのいと、覺む、故ゆ、齡四十四、近き、赤毛を、子とも一箇あり、まれば、麻苗、これをうち、歎き、この殺生の報ひるべし。子孫の栄と樂ひぬ、山獵を、歌と、と、只官の諫めを、よも、聽む、ありける、一日、黑驪の邊、中山の山間、ゆていと、大、ま、就鳥と、駁み、ぬ、か、程、よ、その、処、より、一町、あ、ま、り、山、邊、る、樹、抄、小、兒、の、泣、声、

せ、く、怪、と、ゆ、ひ、て、ゆ、は、り、る、ふ、年、三、才、許、る、俵、子、の、老、く、櫃、の、杖、小、挾、と、と、声、嗚、る、ま、ど、舞、を、り、登、時、某、必、か、う、か、る、深、山、の、樹、上、小、稚、兒、の、あ、る、死、理、を、彼、就、鳥、と、小、擧、ま、り、要、時、彼、処、措、ま、り、あ、ん、然、と、小、擧、小、兒、を、擧、ま、り、就、鳥、の、見、と、擧、ま、り、の、状、を、ま、れ、か、も、あ、ら、う、ち、捨、措、ん、不、便、の、る、ま、り、卸、し、と、見、な、を、と、其、の、樹、の、登、り、辛、う、と、抱、き、卸、し、と、う、る、尚、小、女、の、子、を、貴、人、の、息、女、の、あ、ら、ん、七、宝、と、指、指、め、り、條、龍、膽、の、服、章、と、死、す、袿、衣、の、袖、長、き、を、被、り、下、の、緋、の、衣、を、襲、ま、り、何、処、の、誰、が、子、を、と、回、と、もの、を、ゆ、も、い、ぬ、二、才、幼、三、才、の、稚、兒、の、泣、り、外、の、所、為、も、ま、れ、が、且、懐、か、き、抱、き、の、擊、苗、を、一、件、の、就、鳥、の、只、美、羽、と、の、技、と、り、と、相、携、つ、宿、所、か、り、て、妻、麻、苗、を、云、と、有、つ、よ、と、報、知、せ、る、麻、苗、を、と、り、ま、且、欽、ひ、と、この、見、天、より、俺、們、丈、婦、は、授、お、ひ、の、る、る、べし、是、れ、就、も、殺、生、を、ゆ、ひ、止、ま、ぬ、の、と、と、涙、う、ぐ、と、諫、る、ぬ、ぞ、其、か、う、と、感、悟、

えん美引と縲を全亭環るる長物より小冬の夜還て短きやを暁方ぬるの

第六十九回

仕官を謀る木工作信乃を豪留せ給車と薦て奈四郎四六城を撃つ

信乃乃わろ木工作が昔かたりをうち彼も感歎を授けあう一樹の蔭一河の流も縁るは六寓々一と世の常言いふ宜之吾侪をり和殿をり居停主人とのゝ原来井丹三直秀ゆふ仕へる夢科太郎市と争うんの見るり一秋今さゆ又何を悪んか母の諱と手束と呼まて則直秀ゆの女児を死か大父大塚匠作三戌大人の直秀ゆと共侶の結城ぬ籠城する折子共の為ふ秦晋の因を結びぬるのありさばその義を果さざると日か大父も直秀ゆの共小戦歿をぬる小介後如此々々の故わりて日か大塚番作大人と直秀の息女と環會て送ふ素生と諦む親と親とを結髪する妹と使されば異議も

るる直秀ぬの外孫るるかか為ま亦主筋え扱むくとをりぬ只顧感歎をりけるは又この幾條を側侍はる後妻夏引の直と呆れまのよるもる出来かと目と注のあまもがると思ふる養母の心と表裏る濱路の實の親の名と知るよもる身の幸るると又拈育の恩高き養父の心とるひ汲む涙の泉はと切し押拭へるるや竭ぬ袖ぬ暇るるけり信乃も頻る小慷慨嗟嘆の貌を改めぬる對ひも喃四六城の叟親ぬ大く劣りる吾侪るれども懇望せられて

言と出さるその度又日と決しと允さるる勸解さるといそむが夏引と続ぬ
 膝と進めり然る方さるる必ひもさむ腹立とふれを忘さるるよるは過言
 持病の痲症只後悔の外は海すすゆかき流し心ゆく被ぬひそ
 歎待とそ侍ぬも猶いまでも逗留を願くそとち賂話と出来も
 稍膝行ぬか客人さま御免なりませぬ暮ともより一呼起されて宵一夜
 ぬぬお望の眠さを想像まが主の忠義も要らぬの扶とゆかか奉公
 たり苦し死のいのち御免々々と虚口誑呷さるる賂話と胸むひ免陔
 身衣無禪さ膝頭隠さん為額つけの衆皆咄とち笑ひ信乃も笑ひを
 咳逆さちら紛しと夏引ハ無異の心合言訖まが木工作ハ又改めく濱
 路を信乃引ぬしは實主和譚の飲ひ久後ハさるるまじりさるる御覺
 曉六の鐘の衆皆立別とて要時臥房は退きけりかちその後木工作る

肚裏ぬぬぬ大塚ぬとさふ在り長く足と駐んぬ守さるる願
 ち七御家臣ぬるさるる然れども故もさるる職分さるる
 るふさるる出れる輒さるる獨泡雪奈四郎ぬるる少かり時殺生の友さ
 けと今もさるる公私のさるる易かりこの人と誘へく頼さるるさるる
 日さ大塚ぬ打とさか海遺恨さるる又二箇の拒障且何とさ
 彼人を招きさるる大塚ぬと二席ぬ酒食を羞めさるる中と直さるる彼
 人遂は恨を祛さるる願車の執次さるるさるる優さるる提控さるる尋思
 ちさるる決りか後妻夏引ぬ其さるる信乃と奈四郎と闘諍ぬ
 一筆の紙箇様々々と報知と且奈四郎を妙させんとさるる信乃が仕官の
 車の一條これ彼和睦の方便さるる遺さるる説示と又その意見と向かぬ
 夏引ハさるる歡さるるいと遅く腹黒き女人さるる此も騷さるる俱さるる面さるる

怠慢悔まじも及ばざ大塚ぬももれらのよと言傳くぬう翌此の公務
 のりともそ同僚は委ぬ措く時刻と違ふ必ぬんされ我ホが為のさるる酒
 食の儲あむもよりうち相譚ふそ樂されと實に申す應對の杖茶を薦め
 果子と羞めく大さるる管待ひも木工作の意外の首尾且歡び且感
 翌と契す處に家路を望まかひのりか次の日よりか泡雪奈四郎
 秋実この年来親く使ふ媪内働内との西箇の奴隷ぬ事情と具き示し
 助大乃の為ゆそ兩人共ぬれを従へ曾試の利刀寝刃をわく肌膚ぬ鱗の
 著笠電どのの小倉織の馬上袴子仁田山細の小袖ニツかり被て未の半過る
 比四六城が宿呀子赴きれば木工作ぬう出迎へ客房は請ら軈て盃を
 勸ま後妻夏引も良人と共肴を添え酌も立る款待態大かこるる
 不皿一巡及びと死木工作の禰室ぬ赴き信乃のいぬる日途ぬ事

あゝ奈四郎ぬの詣來ぬの對面と請ぬ聊酒食ぬを客房に赴き
 のひ然下か籠のそとえより亦徒然と慰るよまがそめめ誘ぬと
 のそが立るを信乃の有繫も推辞も二段のそう衣脱更で程ゆん
 和殿ぬのこのを泡雪ぬの報ぬとの木工作邊に今彼奴が俣
 奉らん疾來ぬとのみみく又客房に赴きけり當下信乃のいぬる彼奈
 四郎の小人の武士は似けぬ瀆する手癖は既に見届けぬ彼奴と席を
 俱み酒食の款待も與らぬ盗跖と友と悪木の蔭に遊ば似たり
 わるものがあて心で丸弾をまつれぬ追水ぬもあれかぬ木工作が懇切な
 誘引へと許諾ぬぬぬ已死のる行袂をうち披き衣を袴と
 穿る村兩の一刀と腰帯扇と拿と件の席に赴き奈四郎ぬ對面
 一別已後の安否と訊ぬる席末ぬ坐と占め奈四郎羞て席を譲

上座の請薦も信乃のいふ謙退のて聊も膝を進め静の四表八
 表を相譚ふは辭實なく愛敬あり先度のうら心と如く武藝は誇る氣
 色なきは奈四郎の違ひと豫の用心齟齬するその機を測るる
 心ともさうら鮮く只管信乃と敬ひけり然程木工作の準備の殺数を
 盡しそ屢奈四郎は血を薦め從者媪内慟内さす次の間は呼登し出来
 人本と敵手も酒うち飲せざる程は冬の日も没果りかき木工作の
 彼此は燭を点さず奈四郎主從信乃亦ゆる夜食を差め復盃を更め
 復應もたしく叮嚀るれば客も亦も酔ぬる且々奈四郎の中刀を引
 提しむと浄手は立んとまへ夏引の綿は便宜とる紙燭を秉り先ぬ
 立き縁頼る障子を推開き東の陝室の案内とて物の蔭に立聚合候
 いる夜の聲の趣濱路とらるる名依と大塚信乃が亡妻の霊の馮いと

ぬらる及木工作の信乃をりて女壻有さま欲さるるを辭みく耳き濱
 路が宿所は在るも身とぬ夜の邪魔る信乃は女壻をせられぬ
 中垣と居らぬぬ瀨の遂に絶果る濱路を遠離信乃と去る謀あり
 ちと向ふと奈四郎彼を彼犬塚奴の日仇か折他御へ赴く杖ありを
 いさぞやけのやでぬらる木工作も亦怨いれ且等々と頭を傾け霎時
 按しく亮介とち笑み聲舎卒の折られぬ妙策宵月にてあう箇様
 箇様は詭計りと濱路とち遠ざけ濱路をささると死信乃も亦
 退屈し心他御へ赴く登時途に埋伏し扇撃りまると死先度の遺
 恨を霽さす足とりの議のいと甚くと夏引のつ合笑とそ究竟の如
 案不覚も脱落あると謀し合し遠く先ぬ立り又案内と舊の坐
 席は伴ひけり然程奈四郎の酔る面色と頻る盃と推辞は木工作も

忽諸めるまぬひそと真一ちり説示せ木工作使つ太息を吻く呆として要時のい
 ると恨くる氣色こそひける死ね汲引りく濱路を百さる輝の一條二両月も
 已前る障りきくも渠が某が主筋る大塚信乃と既まら婚縁を結ひたり
 いま披露及後にも主ある女子はいふか美と仕むこの義をのりく左も右も
 皆えわげあうといせも果む奈四郎の眼と瞳く声より立く木工作その何と
 いふ大塚信乃他郷の浪人猿石村の人別は載られるのさぬ子口約束の婁談
 わせとせやう一日死めさるや濱路が其某が美とまら今けり障りを
 やうい出る汝ホ一家のさるむとて罪を脱さる一期の浮沈すあり
 漫子ののさかると深念さるえよいふとと親詰る面赦す刀を拵て權せども
 木工作は些も怯むとて宜かとも親の許は獨女と理り側室石まんとて
 罪ある人を救へぬ民の父母る君々てむこ甲斐四箇郡の常簡する果取

下あがらぬひ更へ婚姻の住所の遠近は依るのさるむと他郷の客とも
 婿を結ぶは是より親況て舊縁ある人をさるむ身が誠心ゆ濱路が為給事の
 汲引せんとあひあつ初より其胸中とよく向決め叔介後云云とせえあべなる
 るは他人の女兒とて物白く親中もさるむ婿とて守を請へぬのいと憚りある
 とも口具千慮の失状尤疎忽といふ死の某の教ゆ足ぬ愚痴の匹夫は
 ひと獨女の色をとり榮利を欲さるると恥と願ふ女兒濱路が代は犬塚殿と
 薦揚る御内人は百措るおん計ひそあまれば被犬塚の武藝の達人當今
 無双の賢者なる俊士を汲引と守の御用は達ぬる美女を薦め榮利を料る
 先安と延延ありかぞ君の禄と食む良臣といれぬんこれより外子陳む死ね答ひ
 けいぞ暇まらんと身と起し酒氣を帯る木工作が常はあつて敦固暴く席を蹴
 立紙戸をひききと外面へ出入を奈四郎の飽やを木工作は馬辱やれて怒氣



八尺專上 彈次口

九六 () 吊 長 色 金 女

會 獸 の 先 録 八 文 外 の
画 者 官 宜 意 を
解 是 へ

木工作

奈四郎

かや四

拙工
不成
自又
破之



八尺傳七 轉卷四


清泉堂 藏


月満腸燃く面色宛焼く如く争んとする小辯を召され柱に掛る鳥銃を
 取りて丸を箆て火繩の頭と指燻る火盆を内りと跳り踰て遣り過り追蒐する
 折戸口より入るにせむ木工作の二町より家路のえゆく処を火蓋を及く撞と放せ
 憐むべ木工作ハ七九の命の邊より腹を礮と撃ち抜ける而銃丸は霎時めは堪
 骨碎け腸断離れ苦痛の声と共侶は仰反付して息絶りこの物御首まで
 来る而箇の奴隷媼内ホを奈四郎と申す之の百姓奴が法外言過言と汝ホも
 貸つらんその活てえられ癒者され敷もゆり此守へ訴せうとて身身の安
 危測がかり計較もあるればとて死骸をとり入れよといふ媼内瞬内ハ齊一
 彼処にまゝゆれ木工作が亡骸を宙吊して奥庭の樹蔭へ軀隠けり畢竟
 奈四郎が木工作と撃殺して又甚麼る話説うあるそ次の巻は解分るを聴ひか
 里見八犬傳第七輯卷之四 終

曲亭主人自評して云大約犬士の妻子眷属の濱路沼菴離衣曳手
 單節ハ貞標心烈のつゝ捷も成薄命め夫婦階老に至るもそれらも
 所以あるものなりと解畫かたり全輯結局の段は追々省官冰解するよ
 あんそ中ハ沼菴離衣曳手單節の四婦人の各々良人は存眉く日の久し
 あつとも既に鴛鴦の衣を襲き潘楊の睦み空にかゝる只濱路のふれ赤繩
 足は敷糸ぐといふも口番いませ敷糸を身の悪棍は傷殺せられ箕箒を冥府に執
 るる由の誰うこれを憐むんからるも別一個の濱路ありて更は信乃と配を便
 是二女一体宛鬼陽人異るれも前身後身一般の如くこの処作者一段の工緻や
 初より意中の包藏を省官後話をあひひびき只つとるをの推て評するありと
 せえり細工の流々落成とつとよの鄙語に似たるものなり
 はいせよいやくほきさるのありて著る草紙物語のありて二三十年及ぶるこの
 剥板若干亡失と全うする故をりて久しく刷出さるものなり板どもあるが索て補

刊すもの予は校訂を乞ふと恣に有像を易文を行脱して再刷せしむる所云
 枯頭巾縮緬帔衣化競及三鐘この他事あるべしこれら予が各号ありとの又とも補
 刊す予が校訂を経ざり他人の事成まるのれ予が全作とせざる古板の戲編と
 物なりといふ大人氣を死に似せると名を售るるが掩隠さふ此と予を識せしむ
 ○本輯七卷楮数を尋かりあをりて彫刻先成る所の四巻を發屋で上帙とす
 發販を下帙三巻の程遠かるを推つぎきき出さんといふ書肆の好まし任り山前
 山後花一時は閑る者官異日のるめを俟く猶春深く繕き定む

○曲亭翁著編里見八犬傳第七輯画者筆工刷人目次

有像
 卷一 二 三 四
 卷五 六 七
 溪齋英泉画


淨書
 卷一 二 三 四
 谷波仙橘


里見八犬傳第七輯下帙

五の卷 六の卷 七の卷
 右近目推つぎ製本指書並に愛出
 中のおぼろもゆ求め所覽せり松下小

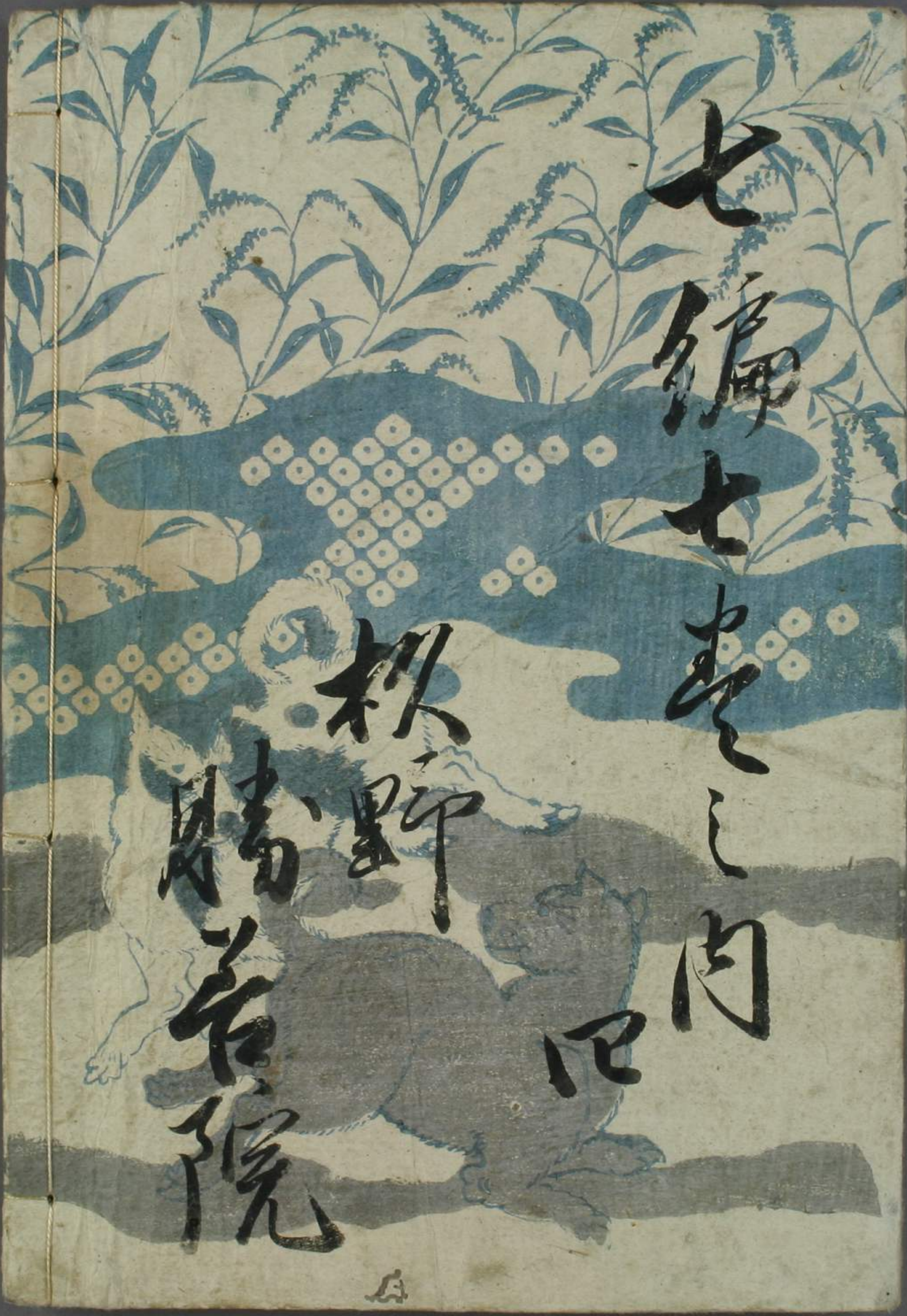
藥方 根元 本家
 大包百箱 半包四十八箱
 河内屋重太郎製

南總里見八犬傳第八輯 曲亭翁著
 初輯より第六輯まで先年より追々刷板
 第七輯此度發販第八輯來已丑の春出板

尼子九牛一毛傳 右同著 初集五卷 近刊

文政十一年戊子春三月吉日發行

小傳馬町三丁目
 江戸書林 丁子屋平兵衛
 心齋橋坊博旁町北江入
 大坂書林 河内屋長兵衛



七
編
七
卷
之
肉

秋
野

晴
名
院

已